

巻頭言

おいでませ!山口国体を終えて

第66回国民体育大会岩手県選手団総監督 鷹觜 文昭
(県体協副会長兼理事長)



去る10月1日から11日まで、山口県下において第66回国民体育大会が開催され、本県からは、県体協会長の達増拓也団長以下、役員・選手合わせて、448名が出場いたしました。

今年は、天皇杯順位23位、得点1,000点を目標に掲げて大会に臨みました。ホッケーやカヌー、ウエイトリフティング、弓道、ハンドボール等の活躍はあったものの、入賞競技数が14、入賞数が47と共に昨年を下回り、得点も715点と目標に大きく届かず、天皇杯順位は41位と目標達成はできませんでした。

3月に発生した東日本大震災により、春期の強化が十分できなかったことや今年度からスタートする予定であった71国体に向けた特別強化事業が凍結されるなど、やむを得ない事情があり、多少なりとも影響があったのではないかと考えられます。

しかし、厳しい状況の被災地からも大会に出場し活躍した選手もおり、更に、全国からも多くの支援の手が差しのべられていたことから、そのせいにばかりはできないものと考えられます。

獲得した得点を分析すると、個人競技では善戦して得点を重ねましたが、団体競技で思うように得点を獲得できませんでした。

また、少年男子がかなり頑張っており、昨年より得点を上げたものの、成年男子、成年女子の得点が大幅に減少しております。

従来から指摘されておりましたが、成年の選手層が薄いという本県の現状・課題が如実に現れてしまったと思われます。大きな課題ではありますが、関係機関等の指導をいただきながら、その対応策を練っていかねばならないと考えております。

一方、開催地の山口県においては、被災した本

県選手団の派遣費を負担していた

だいたほか、聖火リレーの炬火を被災地の釜石市でも採火し、総合開会式で披露していただくなど、被災地復興支援を大きく打ち出した大会を開催してくれました。

総合開会式やどの競技会場においても、被災地岩手のユニフォームを見て、一段と大きな声援を送ってくれたほか、街の中でも「岩手県、頑張ってください。」と声をかけてくれたとの報告も多数あり、選手にとっても心に残る大会になったものと思われま

さて、12月に入り県が71国体の本県開催を決断いたしました。簡素化・規模縮小しても開催したいという関係市町村、競技団体、経済界の意向を十分くんだ決断であります。大震災の復旧・復興もしっかりと推進しなければなりません。県は、財政的にも人的な面でも厳しい状況の中での運営を強いられることになります。

このことから、本協会会長でもある知事は、従来からの「県直轄方式」から「県・民間・関係団体等県民が一体となった方式」(オール岩手方式)で準備、開催していくことを提案しております。その役割分担等は、今後、詰めていくこととなりますが、県体協や競技団体として、市町村体協として、「やるべきこと、やれることを率先して実行する姿勢」が問われることにもなると思われま

今後においては、県及び県強化本部とも十分な協議を重ね、更には、様々な分野の方々ともしっかりと意見交換等をしながら、効率の良い選手強化を図っていくとともに、素晴らしい71国体になるよう着実に準備を推進して、被災地に力強いエールを送り続けたいと考えます。